

日米 2 つの帝国とスポーツからみるハワイ日系 2 世  
—戦前の若林忠志の野球人生を通じて—

17G0808 小林 凌

目次

はじめに

第 1 章 ハワイの日系社会

第 1 節 ハワイへの移民の歴史

第 2 節 日系社会の形成

第 3 節 2 世の誕生

第 2 章 ハワイの日系人野球

第 1 節 日系人野球の起源とその発展

第 2 節 日系球界との関わり

第 3 章 若林忠志の幼少期から日本移住

第 1 節 若林の幼少期

第 2 節 日本移住とその背景

第 4 章 若林忠志の法政大学時代

第 1 節 2 度のアメリカ遠征

第 2 節 スポーツによる思想善導

第 5 章 若林忠志の戦前のプロ野球生活

第 1 節 奉祝事業としての満州リーグ

第 2 節 新体制下のプロ野球と 2 世

おわりに

参考文献

はじめに

1908 年、ホノルルで生まれた若林忠志は、日本人の両親の間に生まれた、いわゆる日系 2 世である。若林はハワイでの学生時代から野球に取り組み、1929 年 4 月、法政大学に入学した。大学卒業後は、1936 年にプロ野球黎明期の大阪タイガースに入団する。若林は戦前の野球生活の中で、法政時代には 3 度のリーグ優勝や 2 度の米国遠征、プロ野球時代には黎明期のプロ野球への貢献というように、様々な形で貢献することになるが、当時の時代背景を見てみると、野球というスポーツの中に、徐々に日米二つの帝国の政治的な思惑を帯びた側面が表れるようになっていた。

若林に関する先行研究としては、森仁志が野球史や日米野球交流史の枠組みの中で若林

らハワイ日系2世の果たした役割を分析している<sup>1</sup>。しかし、若林の活動を、スポーツと政治の関係性を考慮した上で、政治的なコンテクストを視野に入れて分析したものは見受けられない。本稿では、野球史という枠組みを超えて、日米二つの帝国とスポーツの両義性、すなわち国際親善や友好の推進/ナショナリズムとの密接な関係、という政治的なコンテクストの中で、若林の活動を追っていく。とりわけ戦前の若林の野球を通じた活動に焦点を当てながら、若林ら日系2世が果たした役割について検討していく。そこから、若林ら2世の活動が「プロ野球の発展や日米野球交流への貢献」とどまるものではなかったことを示していく。

## 第1章 ハワイの日系社会

本章では、ハワイの日系社会について、日本人移民がハワイへと渡った背景とその歴史、移民たちのハワイでの生活とコミュニティ形成、2世の誕生から描いていく。

### 第1節 ハワイへの移民の歴史

ハワイへの移民が本格的に始まったのは、1885年からと言われている。ではなぜ彼らはハワイへと移ることになったのだろうか。それはハワイにおける製糖業の著しい発展が要因の1つとなっている。当時のハワイでは、米布互惠条約（1875）により、アメリカへの砂糖の輸出に關税がかからなくなっていたため、砂糖の大量生産・大量輸出が行われていた。そのため多くの労働者が必要となり、そこで目を付けられたのが、安く雇えて真面目に仕事を行う日本人労働者であった。1884年にハワイ政府が正式に日本人移民の派遣を要請し、日本政府はこれを承諾した。翌年より、実際に移民がハワイへ派遣された。また1885年から1894年までの移民は、政府の斡旋により行われたことから、「官約移民」と呼ばれる。しかし、1894年になると、ハワイは重大な転換期を迎えることになる。これまで続いたハワイ王国が崩壊し、新たに共和制が敷かれることとなったのである。これにより、日本政府も官約移民を廃止せざるを得なくなってしまう。だが、ハワイへの移民は、民間の移民会社による斡旋で途絶えることなく続いていた。彼らは移民会社と契約を結んだ上でハワイへと渡ったため、「契約移民」と言われる。その後、1898年にハワイがアメリカに併合されると、アメリカの法律がハワイにも適用されることになり、1900年には契約労働者が禁止となる。すると今度は、契約労働に縛られることのない「自由移民」が増加していく<sup>2</sup>。彼らは砂糖プランテーション地帯から都市部へと移っていくだけでなく、中にはアメリカ本土やカナダへと移住する者も多くいた。これがアメリカ人らの反感を買うことになってしまい、1907年には日米紳士協定により、本土への転航制限、翌年にはハワイから本土への転航禁止となってしまう。これをきっかけに、多くの日本人労働者は渡航を諦め、日本から花嫁や家族を呼び寄せ（「呼び寄せ移民」）、ハワイでの永住を目指して

<sup>1</sup> 森仁志『越境の野球史 日米スポーツ交流とハワイ日系2世』関西大学出版、2018年。

<sup>2</sup> 同上書、59ページ。

いくようになった。1900年から1924年の間に、20,000人を超える日本人女性がハワイへやってきたが、その多くは女性の家族と男性との間の写真交換によって結婚の約束がなされる「写真花嫁」であった<sup>3</sup>。また上記のことから、相当数の子供（2世）が誕生していくことは、想像に難くないだろう。このハワイを含めた各地での日系人の増加に危機感を感じたアメリカ政府は、1924年の排日移民法により、日本人移民を全面的に禁止した。これがおよそそのハワイの日本人移民の経緯である。要するに、様々な社会的な背景の移り変わりによって、日本人移民の形態は4つに分かれていたということである。

## 第2節 日系社会の形成

ここでは、ハワイにおいて日本人移民が日系社会を築いていく過程や、ハワイの社会との関わりについて見ていきたい。

ハワイへ渡った初期の日本人労働者は、先述した通り、プランテーションで製糖業に従事していく。プランテーションでは、労働者たちは民族集団別に振り分けて住まわされた。仕事の役割も分担され、ポルトガル人はルナと呼ばれる現場監督になる場合が多く、実質的な農作業はアジア系の移民が担った。さらに、賃金も民族集団別に差別され、例えばポルトガル人よりも中国人の賃金は安く抑えられ、日本人は中国人よりもさらに低い待遇を受けた。これらの居住地や職業や賃金の差別待遇は、民族集団を横断した労働者の連帯を分断しようとする白人資本家たちの意志のあらわれであった<sup>4</sup>。このように日本人を含む移民労働者たちは、民族集団別に管理されたことにより、それぞれの民族で独自に発展していくようになるのであり、これをきっかけに日系社会の構造化が進んでいく。初期の日本人コミュニティでは、徐々に生活の基盤が整えられていくような動きが見られる。例えば、砂糖耕地での労働の他に、副業として理髪店や風呂屋、賄方（コック）と呼ばれる独身男子のためにその生活をサポートするような職業を営む者もいた。なお賄方を専門に営業する者を大賄方（大コック）と呼び、彼らはその土地に永く住み事情も通じて、多少人の上に立つ人であるから、初渡航で知人のない人が、この大コックを頼っていけば万事世話をしてくれた<sup>5</sup>。ここからも、日本人間の民族意識や団結力の高さなどがうかがえる。

1900年代になると、日系人はハワイ全人口に占める割合が約40%になるなど、ハワイで最大の民族集団となっていった。

表1 ハワイの人種別人口

<sup>3</sup> フランクリン王堂（宮地ひとみ訳）「ハワイの二世 一九二〇年代」、沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容』ナカニシヤ出版、1998年、109ページ。

<sup>4</sup> 森仁志、前掲書、59ページ。

<sup>5</sup> 飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版、2003年、61ページ。

	1884 年	1890 年	1896 年	1900 年	1910 年	1920 年	1930 年
日系 白人 全人口	116	12,610	24,407	61,111	79,675	109,274	139,631
日系の 占める 割合 (%)	0.1	14	22.4	39.6	41.5	42.7	37.9

出典：飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版、2003年、17ページより、筆者作成。

アメリカのハワイ併合（1900年）の影響で労働条件が以前よりも保護されたものになったこともあって、彼らはさらなる労働条件（賃金）や労働環境の改善などを求めてストライキをおこすようになった。ではなぜ日本人労働者たちは賃金の値上げを求めるようになっていったのか。それは2世の誕生と深いかわりがある。次節では、このことについて詳しく述べていく。

### 第3節 日系2世の誕生

ここでは、2世の急激な増加と彼らのハワイ社会における立ち位置を、当時の時代背景から分析していく。

1907年の日米紳士協定、さらに1924年の排日移民法により日本からの新たな移民が途絶え、ハワイの日本人移民たちがそこでの永住土着を目指したことにより、1900年代後半から1920年代にかけて、ハワイで生まれる日系2世が急速に増えるようになった。この頃から、日系社会では日本語学校が相次いで建てられるなど、2世の教育に力を入れるようになっていった。これは1世（親の世代）が2世に対して、日本語や日本文化、日本らしさを学んでほしいという気持ちのあらわれを示していると言えるだろう。2世に教育を受けさせるためにはもちろん、教育費が必要となってくる。このために1世は賃金の値上げのためストライキを行うようになっていったのである。しかし、当時のアメリカでは、米化主義運動や移民のアメリカへの同化をさせようという風潮が見え始め、これが重要な課題となっていた。藤原孝章は米化運動を、「もともと都市スラムでの移民の生活改善運動と米国への忠誠を求める国家主義的運動に端を発した」運動であったが、第一次大戦時のドイツ移民や東欧系移民の祖国支持の動き、さらにはアメリカ参戦により高まった愛国心を背景に、『分割することのできない忠誠心を持つアメリカ人』、『100パーセントの米化論』が唱道され、国民運動となったものである<sup>6</sup>と述べている。ハワイにおいては、日系

<sup>6</sup> 藤原孝章「ハワイ日系社会の文化と社会の変容－1920年代のマウイ島の事例－」、沖田

人の急増、そして1世の2世に対する日本人らしさを望む教育などが、ハワイの支配層にとってはあまり好ましくない状況であったことから、主に日系2世に対して米化を進めるように動いていた。エイリーン・タムラ (Eileen.H.Tamura) によれば、ハワイの米化主義者が2世に望んだものは、「合衆国に対する二心なき忠誠」であり、すべての「日本文化を消し去る」ことであった。標準英語を読み、書き、話し、キリスト教徒になり、法を遵守し、そして善良な耕地労働者になることであった<sup>7</sup>。当時の2世は、ハワイの社会からはアメリカ人になること (=同化すること) が求められ、反対に1世や日系社会からは日本人らしさが求められていたのである。つまり、2世は生まれ故郷であるハワイと両親の母国である日本との間で板挟みになっていたのである。これに関して、2世の一人は、「私たちはここに、2世のおかれたアンビバレンツな心情を見ていいのかもしれない。ホスト社会からは米化を、1世からは日本人らしさを求められた2世が、日本人らしさを保持したアメリカ市民になっていった、そのようなものとして文化変容をとげていった人格的表現がここに表れているとっていいのではないだろうか<sup>8</sup>」と述べている。

このようにして、彼ら2世は、ハワイのホスト社会からはアメリカ人として生きていくことを教育されながら、その裏側では日系社会から日本人としての意識を忘れないように日本語や日本文化を学ぶことを必要とされていた。これは後に若林を含む日系2世が野球を通じて日米をつなぐ役割を担うことができた1つの重大な要因であると考えられる。

## 第2章 ハワイの日系人野球

本章では、ハワイにおける日系人野球の発展の歴史の変遷と、日系人野球チームと日本球界との関わりについて述べていく。

### 第1節 日系人野球の起源とその発展

ハワイにおける野球の起源は諸説存在している。その中で最も有名なものは、アレクサンダー・カートライトにより伝えられたとするカートライト説である。しかし、森仁志が「たったひとりの『英雄』や『父』ではなく、数えきれないほど多くの人たちがさまざまな形で貢献することによって、ハワイの野球は漸進的に現在の形へ近づいてきた<sup>9</sup>。」と述べているように、カートライトも含むすべての野球に携わっていた人々の努力により野球が広まり、発展していったと考えるべきだろう。こうして、野球はハワイの社会に根付い

---

行司編、前掲書、159ページ。

<sup>7</sup> 同上論文、160ページ。

<sup>8</sup> 同上論文、158、177ページ。文化変容は、タムラ概念である。タムラは、行動様式や価値観の変化、仲間やクラブでの交流、他民族との通婚、市民権の獲得、ホスト社会と同一化といった2世の経験を。ゴードン (Milton M.Gordon) の構造的同化の概念を中心に捉え、かつ、文化人類学者のいう民族的アイデンティティを保持しているものとして捉えている。

<sup>9</sup> 森仁志、前掲書、44ページ。

ていくことになったが、それが急速に進展した要因の1つがプランテーションにおけるストライキである。プランテーションの経営者たちは、労働者の不満を取り去るために、音楽や映画とともに野球を導入した。さらに、プランテーション内に民族別のチームをつくり、大会を開催するなど民族ごとの対抗意識を芽生えさせ、野球のみならずプランテーションでの労働の生産性向上にも結び付けた。このように、野球のハワイ社会への浸透の流れの中で、プランテーション経営者による労働者のストライキへの対応の一環として、野球が利用されていたという側面も存在していた。しかし、その結果としてプランテーション内にグラウンドが整備されるなど、野球を存分に行える環境が整えられていったのである。

ここからは、ハワイにおける日系人野球の発展について見ていきたい。日系人野球のルーツとなったのは、奥村多喜衛牧師が開設した日本人寄宿舎の児童により組織された JBS である。1899 年頃に「強健なる身体に強健なる精神宿る」という方針のもと誕生した JBS は、1904 年に青年部と少年部からなるエクセルシア（日進倶楽部）に再編成される<sup>10</sup>。この頃は、満足にグラウンドを使って練習をすることができなかつたため、ダウンタウンの空き地などで練習や試合をすることが多かった。「下町組」と呼ばれる少年たちは、負けると試合のあとに喧嘩になることが多々あるほど、情熱をかけて野球に取り組んでいた。特に中国人チームとの試合では荒れることが多く、もはや試合どころではなく、「小さな日清戦争となった<sup>11</sup>」という。1903 年には、空き地の「下町組」の中で活躍するリーダー格の選手たちが集まって、新たに JAC（日本運動倶楽部）が結成された<sup>12</sup>。1906 年にはリバーサイドリーグが結成される。このリーグでは上記の JAC のほか、中国人チームや多人種の混合チームなどが参加し、民族別のチームによる対抗戦が行われていた。だが、それもそう長くは続かず、JAC は日系人選手の減少により衰退、リーグも徐々に分裂して行ってしまった。これが日系人野球の黎明期の流れである。そして、これまでに言及してきたチームに変わり、日系人野球の発展に大きく貢献していったチームは、1905 年に結成された「朝日」である<sup>13</sup>。朝日は JAC の選手たちに憧れたスティア野田義角など年少の子供たちを中心としたチームで、日系人の商店主の援助を受け、誕生した。彼らは積極的に他チームと対外試合を行い、着実に力をつけていった。一方同じころ、別の 1 世たちの支援により、「櫻花」が結成されていた<sup>14</sup>。櫻花を構成するのは、当初 JAC に参加していた選手たちであった。この 2 チームに加え、日系人チームが次々と結成されていった。これにより、1908 年には、日系人チームのみのリーグ戦が行われるようになるほど、日系人たちの野球に対する興味を持つようになってきていたのである。この時に日系人たちが野球に注目するようになったのは、主に 2 つの理由が存在する。1 つは慶應大学野球

---

<sup>10</sup> 同上書、64 ページ。

<sup>11</sup> 同上書、66 ページ。

<sup>12</sup> 同上。

<sup>13</sup> 同上書、68 ページ。

<sup>14</sup> 同上書、71 ページ。

部の招待で、ハワイのセントルイスカレッジが1907年に日本遠征を行ったこと、もう一つはその翌年、慶應大学野球部がセントルイスの日本遠征の返礼も兼ねて、ハワイ遠征を行ったことである。これをきっかけに、日本からは早慶をはじめとした大学の野球チームがハワイ遠征を行うようになり、ハワイからは大学や日系人チームなどが日本遠征を行うようになった。こうしてハワイの日系人野球界と日本球界は関係を持つようになっていく。

## 第2節 日本球界との関わり

『布哇邦人野球史』の著者である後藤鎮平が誇張気味に「極東球界の覇者、城南の健児、三田の勇者として世界の野球界に知られたる、我が慶應野球部選手は、鷲澤監督に率いられて堂々たる其勇姿を、南国の都に顕した」と伝えているように、とりわけ日系人の野球関係者にとっては待望の来布だった<sup>15</sup>。彼らは日本球界との交流を大変歓迎し、日系人野球のさらなる発展のためにはそれが効果的であると考えていた。この慶應の来布後も、1910年には早稲田大学野球部の来布、翌年には慶應がアメリカ本土への遠征の帰りにハワイへ寄港し、交流戦を行っている。特に早稲田の来布の際には、ハワイで日系人チームを代表するほど実力をつけていた朝日が早稲田と試合をする機会があった。結果は10-0で朝日が1得点も取れずに大敗することになった。このように当時の日系人球界と日本球界ではまだまだ埋められないほどの差があったのである。その後の日系人野球は、5つのリーグが開催されるなど、さらに加熱していった。

1913年になると、布哇中学がハワイから初の日本遠征を敢行することとなった。日本の中学チームと計10試合の交流戦を行い、5勝5敗と5分の成績を残した。さらに、1914年には、3回目のハワイ遠征をしていた慶應と朝日が交流試合を行い、とうとう朝日が勝利をかざった。このことから、たった数年のうちに、日本球界に対抗できるようになるほど、ハワイの日系人チームは腕を上げていたことが読み取れる。これは一層レベルの高かった日本球界との交流によるものが大きいのではないだろうか。しかし、朝日は幹部と選手との対立によって分裂し、選手たちは全日本人（オールジャパニーズ）として独立した。1915年に全日本人は日本遠征を行う。その遠征では、全日本人は早慶に全敗を喫してしまい、ハワイの日系新聞『日布時事』では、「布軍は所詮中学チームの雄たる力量以上に出る事が出来ぬ」などといった記事を掲載し、全日本人を厳しく批判した<sup>16</sup>。

次に、日本人がハワイ遠征を行ったときにハワイに対してどのような感想を抱いていたのかを紹介していきたい。1914年に遠征をした明治大学の選手は後年、『明治大学野球部史』で次のように振り返っている<sup>17</sup>。

---

<sup>15</sup> 同上書 72 ページ。

<sup>16</sup> 『日布時事』1915年10月6日。

<sup>17</sup> 森仁志、前掲書、82 ページから引用。

チームは在留邦人になかなか人気があった。前年遠征した慶大が、中国人チームに敗れたときに、中国人がお祭り騒ぎをやって日系人をくやしがらせたようだが、明大がその中国人チームに勝って仇をとったことも手伝って、*“メイジ・ボーイ”*と大モテだった。

裏を返せば、日系人の関心の高さは、安藤忍が漏らしたように「負けて帰る時などは顔を上げて歩けない」ほどの重圧にもなった<sup>18</sup>。つまり、日系人たちは野球に高い関心を持ち、他民族チームと戦う母国の大学野球部を応援してくれるものの、その民族意識の強さやハワイの他民族に対する対抗心から、まるで負けることは許されないというようなプレッシャーを生んでしまっていたのである。ハワイの日系人にとって野球は単なるスポーツではなく、民族の地位向上などにも関係する、いわば代理戦争のようなものであった。

さて、ここでハワイの日系人球界に話を戻そう。1925年にはハワイ・リーグが設立された。このリーグは、朝日・白人チーム・フィリピン人チーム・ハワイアンチーム・中国人チーム・ポルトガル人チームと各民族を代表するチームにより構成されていた。各チームがプライドをかけて戦い、競い合うことで、プレーが磨かれ、観客も注目するようになった。これにより、ハワイ球界は最盛期を迎えることになるのである。

### 第3章 若林忠志の幼少期から日本移住

本章では、若林の生い立ちから日本移住までの生活を追いながら、なぜ若林が日本へ渡ることになったのかなどを明らかにしていく。

#### 第1節 幼少期

若林忠志は1908年にオアフ島ワヒアワで生まれた。父親は広島県から自由移民時代の1901年にハワイにやってきた若林幸助で、母親のこまも広島県出身であるため、日本人の両親の元に、5男5女の9人兄弟の3男として生まれた日系2世である。誕生してすぐにホノルルの日本領事館に届け出たため、日本とアメリカの二重国籍を得た。とてもわんぱくな男の子であったことから、父に厳しく叱られていたという。ワヒアワの公立学校時代では、「僕の家は学校から2里離れたところにあった関係でもあるが僕は父から馬を買ってもらって毎日馬で通学していた<sup>19</sup>。」と述べていることから、家庭はとても裕福であったことがうかがえる。その後、日本式の厳しい教育をしていた大和学園<sup>20</sup>に入れられた。ストライキによって学校が閉鎖されたのち、曹洞宗の崇洞寺に預けられた。そこでは若林に手を焼いた和尚から追い出されてしまうほどだったという<sup>21</sup>。その後、ホノルルのマッキ

---

<sup>18</sup> 同上書、83 ページ。

<sup>19</sup> 若林忠志「僕の野球生活」（法政大学高等師範部『鳳生』より）145 ページ。

<sup>20</sup> 日本人の子弟ばかりであった故か萬事が軍隊式であった。同上。

<sup>21</sup> 森仁志、前掲書、100 ページ。



ンリー・ハイスクールに入学すると、当初はアメリカンフットボールに精力的に取り組んだ。この頃から日系人ではない友達が「坊主」を聞き取ることができず、「ボズ」というあだ名で呼ばれていた。しかし、ある日の試合中、若林はタックルと同時に後頭部を蹴られて2か月の入院を伴う重傷を負った。これをきっかけに、父の反対もあってフットボールを断念せざるをえなくなった<sup>22</sup>。

若林は17歳の頃から本格的に野球を始めることになったのだが、ここで野球の才能が開花するのであった。当初は「勇敢な男」の象徴である捕手を目指したが、のちに阪神タイガースで若林とバッテリーを組むことになる1年上のカイザー田中義雄に「ピッチャーをやってみないか」と勧められたことで、若林の人生は大きく動くことになった。投手として急成長し、朝日にスカウトされるようになるまで有名な野球選手となっていた。当時のことを若林は「野球が飯よりすきになり一生懸命に練習をはじめた<sup>23</sup>」と回想しているように、若林の野球に対する情熱は凄まじいものであった。その後、アメリカ本土の日系人チームであるスタクトン大和の日本遠征の際、同チームに勧誘された。父はこれに参加することに反対したが、部屋に閉じこもり、父に反抗したと言われている。その結果、何とか父の許しを得てスタクトン大和の選手として日本遠征をすることが決定したのである。この日本遠征の様子や日本移住については次節で述べていく。

## 第2節 日本移住とその背景

1928年4月、若林は横浜の町に降り立った。若林はそのときのことを「あのときの感動はいまでも手にとるように覚えている。船から横浜の町がみえはじめたとき、思わず目がしらがくもって…」というように振り返っている<sup>24</sup>。また試合を通じて日本の選手たちの人柄や価値観にふれ、とりわけ礼儀正しきは印象に残った<sup>25</sup>。若林は日本にとっても好印象を抱いていたことが読み取れる。そしてその遠征中、法政大学の熱烈な勧誘を受け、入学すること、つまり日本への移住を決意するのである。だが、ハワイ球界ナンバーワン投手と言われることもあった若林ほどの実力があれば、アメリカ本土に渡り、野球をすることも可能であったのではないだろうか。それなのになぜ日本で野球をすることを選んだのか。その理由は様々考えられるが、やはり最も重要なことは、アメリカ本土のアメリカ人の日系人に対する差別意識、排日感情にあるのではないだろうか。若林が法政入学を決めた時期は、ちょうど排日移民法の影響もあり、日系人に対する排日の意識が急激に高まっていた時期であった。さらに、米球界の頂点であったメジャーリーグでは、白人以外の者がプレーすることは許されていなかった。このような背景があり、特に親世代である1世にとって、アメリカ本土へ2世を送り出すということはとても考えられるものではなかつ

---

<sup>22</sup> 同上書、101 ページ。

<sup>23</sup> 若林忠志「僕の野球生活」(法政大学高等師範部『鳳生』1933年12月28日、146 ページ。より)

<sup>24</sup> 山本茂『七色の魔球—回想の若林忠志』1994年、7 ページ。

<sup>25</sup> 森仁志、前掲書、105 ページ。

たと推測できる。しかし、2世野球人の中には、メジャーリーグで活躍することを夢見てアメリカ本土へ渡った者もいた。その人物はのちに日本のプロ野球界でもプレーしたジミー堀尾文人である。彼はアメリカでプレーすることを当然のごとく両親に反対されたが、夢を追いかけるため、単身アメリカ本土へと向かった。その後、メジャーリーグではプレーできなかったものの、1つ下のマイナーリーグで活躍することになった。このように、アメリカ本土で野球をすること自体は決して不可能ではなく、実際に若林にもカリフォルニアのセント・メリーズ大学からオファーが届いていた。しかし、若林が日本でプレーすることを選んだのは、当時の日系人を取り巻く状況以上に、若林自身の意志が大きく関係していた。法政大学との交渉の際、「ハワイのパパとママに日本語で手紙を書きたいんです<sup>26</sup>」と述べていることや、ハワイの父に「ぼくはいま、日本の法政大学に誘われている。ぜひ法政に入りたい<sup>27</sup>」と手紙を送っており、日本で野球をしていくという若林の強い意志が垣間見える。こうして若林は両親の祖国である日本へ移住することになった。

## 第4章 若林忠志の法政時代

本章では、法政大学でプレーすることになった若林の日本での生活に着目し、日系2世としての若林の苦悩などを明らかにする。

### 第1節 2度のアメリカ遠征

法政への入学が決まった若林であったが、その直後に最初の試練が訪れた。六大学のマネージャーらの「今後も安易に日系2世をスカウトする風潮が生まれては好ましくない<sup>28</sup>」という批判を受け、のちの会議で「六大学リーグに出場できるのは日本の中学校を卒業した者のみ」との決定が下されてしまったのである。これにより、若林は横浜の本牧中学校（現在の横浜高校）に編入することになった。そこでは、日本語の授業についていくことが難しく、かなりの苦労を味わうことになった。特に軍事教練では、若林は「ぼくは軍人じゃない<sup>29</sup>」と抗議をするなど、ハワイと日本の教育の違いを肌で感じるようになった。しかし、こういった文化の違いを受け入れることができたのは、彼自身日本に溶け込むことをモットーとしており、何よりも早く法政で野球をしたいという思いがあったからではないだろうか。若林は本牧中に7か月在籍し、1929年4月、ついに法政大学へ入学することになった。鳴り物入りで法政野球部へ入部した若林であったが、当初は日米の野球の違いに苦しむこととなった。デビュー戦となった4月21日の早大戦で打ち込まれてしまい、チームメイトやファンの期待を裏切る結果となってしまった。ハワイへ帰ろうとまで考えた若林であったが、監督代行の藤田信男に「きみは日本人だけでなくハワイの日系

---

26 山本茂『七色の魔球 回想の若林忠志』ベースボール・マガジン社、1994年、12ページ。

27 同上書、28ページ。

28 同上書、15ページ。

29 同上書、31ページ。

人の期待を一身に背負っていることを忘れてはならない<sup>30</sup>」と諭され、またチームメイトの島秀之助から「六大学の打者と対戦するときは、コントロールが大事だ。日本の野球に慣れることだよ<sup>31</sup>」というアドバイスを受けたことで、再び前を向くことができた。しかし、1929年春シーズンは法政も若林自身も結果を残すことはできなかった。夏になると、若林が里帰りするということを耳にしたハワイの日系紙「日布時事」の招待で法政のハワイ遠征が行われた。当時のことを島は「太平洋の楽園に降り立ったときのよろこびは、春のリーグ戦のモヤモヤをいっぺんに吹きとばしてしまった<sup>32</sup>」と回想している。このハワイ遠征は、リーグ戦で中々結果が出ていなかった法政野球部員たちにとって、良い息抜きのお機曾となったに違いない。ハワイ遠征では、地元のハワイ・リーグのチームと試合を行った。それらの試合では、多くの日系人が法政の応援に駆け付け、連敗を喫した際には、2世の若者たちが「次は大丈夫 (Next time all right!) <sup>33</sup>」と声をかけてくれるなど、ハワイの日系人たちの若林ら法政野球部に対する期待を読み取ることができる。このハワイ遠征で力をつけた法政野球部と徐々に日本の野球に適応していった若林は、翌1930年秋のリーグ戦でついに初めての優勝を果たした。当時の法政大学は「ヒットレス・ワンダー・法政」(打てなくても勝ってしまう不思議なチーム、の意)と言われたそうだが、それだけ若林を中心とした守りのチームであった<sup>34</sup>。こうして念願の初優勝をすることができた法政は、翌シーズンに初のアメリカ遠征<sup>35</sup>を行うことになった。このアメリカ遠征で若林はグラウンド外での活動にも力を入れていた。現地の中学や高校で講演して「日米は太平洋をはさんだ隣国だからたがいに理解しあって親善に力を尽くさねばならない<sup>36</sup>」と力説するなど、野球を通じた日米の親善について本気で考え、行動を起こしていた。また、このアメリカ遠征は、法政野球部にとって大きな意味を持つものであった。イリノイ大学のコーチであるカール・ラングレンの指導書を翻訳(若林も尽力)し、1932年に『野球読本』として出版された。同書は、法政野球の根幹を成す、いわば「バイブル」として読み続けられている<sup>37</sup>。アメリカ遠征から帰国後の1931年11月、野球を通じた日米親善を目指す若林にとって、大きなチャンスが訪れる。読売新聞社社長の正力松太郎の招聘により、大リーグチームが来日し、全日本チームと試合を行うことになった。当時肩や肘を痛めていた若林は、選手としてよりも通訳や大リーグ選手らの案内役などに精を出した。こ

---

<sup>30</sup> 同上書、40ページ。

<sup>31</sup> 島秀之助『白球とともに生きて ある審判員の野球昭和史』ベースボール・マガジン社、1988年、61ページ。

<sup>32</sup> 同上書、62ページ。

<sup>33</sup> 山本茂、前掲書、47ページ。

<sup>34</sup> 「法政大学の歴史(6)」法政大学校友連合会報、2006年1月1日。

<sup>35</sup> 当時はリーグの優勝チームが翌シーズンを欠場してアメリカ遠征を行うことが慣例となっていた。

<sup>36</sup> 山本茂、前掲書、82ページ。

<sup>37</sup> 法政大学史委員会・法政大学史センター『法政大学野球部創部100周年記念展示会 法政野球100年解説集』、2016年、12ページ。

のとき、のちに日米の野球交流に多大な貢献をすることになるフランク・オドゥールとの仲を深める。若林のこの献身的な働きにより、日米野球交流は大きく前進することになったのである。

このように、2度のアメリカ遠征や大リーグチームの来日から、若林の野球を通じた日米親善に対する貢献を見て取ることができる。また、高まる反日感情に苦しんでいたハワイの日系人たち<sup>38</sup>にとって、若林の日本での活躍は大きな希望となっていた。若林は法政の3度の優勝に貢献するなど、その期待にしっかりと応えていった。

## 第2節 スポーツによる思想善導

若林が法政で活躍していた頃、スポーツの政治的側面が表面化するようになっていった。日本政府は1928年の三・一五事件をきっかけに、「思想善導」の手段としてスポーツに着目し、奨励しはじめる<sup>39</sup>。これは検挙者の中に多くの学生が含まれていたことが関係しており、スポーツを通じて「不健全な思想」の撲滅、運動精神の涵養などを進めることを目的としていた。この国家のスポーツによる思想善導は、満州事変の勃発とロサンゼルス五輪の開催によって、さらに加速していくことになった。スポーツ史学者の坂上康博はロサンゼルス五輪に関して、「そこには、満州事変によって悪化したアメリカの対日感情を好転させるという外交政策上のねらいが込められていた<sup>40</sup>」と指摘している。このことは、オリンピックが政治性を含むべきでないとする近代オリンピック開催当初からの考えに反している。さらに、「ロス五輪でみせた若いスポーツマンたちの活躍は（中略）日本人の可能性を日本人自身に再認識させ、ナショナル・プライドを日本人の胸に植え付けた<sup>41</sup>」と述べている。この愛国心がスポーツマンシップやスポーツの本来の目的を見えなくさせてしまったのである。こうしたスポーツの政治利用が行われるようになっていく中で、野球にもその目が向けられていくようになった。1932年、文部省によって「野球統制令」が発令された。これは当時の「学生野球の商業化」批判を契機に、学生野球の浄化を目的としたものである。これにより、プロとアマの交流試合が禁止され、選手争奪戦や対外試合の興行化が制限されることになった。統制令の作成に関わった文部省体育課長の山川健は「スポーツの官僚化というのがそんな意志は毛頭ない<sup>42</sup>」と述べる一方で、大日本体育協会名誉主事の郷隆は「純理的に見て明らかに誤り<sup>43</sup>」と述べている。また慶應大学野球部監督であった腰本寿は、統制令が出された理由は肯定しつつも、その内容については

---

<sup>38</sup>実際に、パイナップル畑を持っていた若林の父・幸助は真珠湾基地拡張計画により立ち退きを命じられ、こまとともに無一文で日本へ帰国することになった。

<sup>39</sup> 坂上康博『スポーツと政治』山川出版社、2001年、34ページ。

<sup>40</sup> 同上書、48ページ。

<sup>41</sup> 坂上康博『権力装置としてのスポーツ 帝国日本の国家戦略』講談社選書、1998年、181ページ。

<sup>42</sup> 「読売新聞」1933年3月1日。

<sup>43</sup> 「読売新聞」1935年2月13日。

問題があるとしている<sup>44</sup>。このように賛否の分かれた統制令であったが、当時の文部省がスポーツを通じた「思想善導」を目指していたことを考えれば、学生野球への直接干渉はその一歩となっていたと考えられる。この統制令は、日米野球交流に対しても大きな影響を与えた。1934年11月、読売新聞社嘱託の鈴木惣太郎らの尽力で、ベーブ・ルースやルー・ゲーリッグら多くのメジャーリーガーを含む全米選抜チームが来日し、2度目の日米野球が行われた。しかし統制令によって、学生とプロ選手の試合が禁じられていたことから、当時学生であった若林はこの日米野球に出場することができなかった<sup>45</sup>。野球を通じた日米親善を目指す若林にとって、この大舞台に立つことすら許されなかったということはとても歯がゆかったであろう。国家によるスポーツの政治利用が始まったことで、若林もその渦に巻き込まれていった。また、野球統制令の発令を契機として職業野球団創設の動きが加速していく。のちに「後樂園イーグルス」という球団を設立した河野安通志は、行き詰った日本球界の現状を打開するためには「野球を専門にやる人、即ち職業野球団が生まれるより他に途がない<sup>46</sup>」と述べており、先の日米野球で全日本軍の監督を務めた市岡忠男は、「日本の野球はほんとうに行き詰まっている、この原因は一口に学生の野球であるためだと言い得る<sup>47</sup>」と語った。このように、野球界では職業野球団創設の必要性が議論されており、その実現に向けて動いていた。そういった状況下で、正力は「大日本東京野球倶楽部（東京ジャイアンツ）」（現在の読売ジャイアンツ）を結成し、六大学の元スター選手らを勧誘していった。若林にも声が掛かるが、房や半兵衛は「野球を職業にして生活するなどありえない」と一蹴した。当時は野球を職業にするという考えは現在のように定着しておらず、房が「職業野球はまだ日本ではヤクザな仕事というイメージがあった<sup>48</sup>」と語り、東京ジャイアンツに入団した水原茂も、「周囲の事情としては、プロ野球に入るようなやつは就職もできない、どこの会社も雇ってくれない、いわばやくざの道に入ったかのように軽蔑した目で見られていた<sup>49</sup>」と述べているように、野球界と一般社会の間には大きな溝があった。若林自身はアメリカにおけるプロ野球選手の社会的地位の高さを理解していたが、家族の反対も同時に理解していたため、法政を卒業後の1935年4月、社会人としてレコード会社「日本コロムビア」で働きながら、同社の実業団チーム「川崎コロムビア」で野球を続ける道を選んだ。しかし続々と職業野球団が新設され、日本職業野球連盟（以下、連盟）の結成やリーグ戦の開催が決まり、野球を職業にするという道が徐々に現実味を帯びるようになると、若林は野球に専念したいという思いから、職業野球

---

44 田代正之「中等学校野球の動向からみた「野球統制令」の歴史的意義」スポーツ史研究第9号、1996年、16ページ。

45 実は若林にも誘いがあったが、法政を中退する必要があったため、妻の房や義父の本間半兵衛の強い反対もあり、参加しなかった。

46 「読売新聞」1934年12月8日。

47 同上。

48 山本茂、前掲書、139ページ。

49 森仁志、前掲書、175ページ。

に身を投じることを決意するのである。

## 第5章 若林忠志の戦前のプロ野球生活

本章では、プロ野球の道へ進むことを決めた若林の生活に着目し、徐々にアメリカとの戦争へと突入していく時代で、若林ら2世がどういった立場にあったのかなどを考察する。

### 第1節 奉祝事業としての満州リーグ

1936年1月10日、若林は阪神電鉄により設立された「大阪タイガース」（現在の阪神タイガース）に入団した。翌日の新聞で若林は「結局身についてボール生活で今後を処してゆくのが一番よいと考え先輩知人にも相談して決定した<sup>50</sup>」と語っている。こうして職業野球人としての生活が始まった若林であるが、その戦前の野球生活の中で特筆すべきものは、1940年夏に行われた満洲遠征（通称：満洲リーグ）である。これは日本の紀元2600年を奉祝する事業として行われた、政治色の強いものであった。1937年に勃発した日中戦争をきっかけにして、軍部による外来スポーツ批判や武道奨励が始まった。さらに日中戦争が長期化で米英との関係が悪化していくと、軍部は学生野球の統制に乗り出すようになり、平日の試合を禁じるなどの措置を行った。1932年の野球統制令によって国家による野球の政治利用が行われてきたわけであるが、1936年の二・二六事件で台頭してきた軍部にとってはそうではなく、日本古来より続く武道を奨励することが思想善導に一番良い方法であると考えていた。そのため、法政大学の顧問でもあった荒木貞夫陸軍大将が、「野球はアメリカ人の真似で下品である<sup>51</sup>」と述べているように、外来スポーツである野球は批判の対象であり、野球界を軍部の統制下に置くことでその動きを常に監視し、コントロールしようとする狙いがあったのではないだろうか。こうして軍部による圧力が強まった野球界は、国家の思惑を先取りして戦争協力の姿勢を示すことで、自らの存在意義をアピールするようになる<sup>52</sup>。1940年に日本で開催される予定であったオリンピックが日中戦争の勃発に対する諸国の反発や資金の枯渇などの理由により中止となったことで、このオリンピックを通じて大日本帝国の威容を世界に示そうとしていた軍部は日中戦争を戦うために、紀元2600年の建国神話を用いて国民の精神を戦争へと向かわせることを決めたのである。こういった軍部の動きに対し、職業野球界がとった対策の1つとなったのが満洲リーグである。これに関して興味深いのは、ハワイで生まれ育った若林ら2世が参加していたことである。この満洲リーグを主催した「満洲日日新聞」は満鉄の機関紙であり、主催するイベントはそのまま国策に沿ったものであったことや<sup>53</sup>、満洲遠征団長の河野安

50 「読売新聞」1936年1月11日。

51 法政大学史委員会・法政大学史センター、同上書、14ページ。

52 坂本邦夫『紀元2600年の満洲リーグ 帝国日本とプロ野球』岩波書店、2020年、192ページ。

53 同上書、207ページ。

通志がこの遠征の意義について「野球を通じて日本精神を満洲に在住する 10 万の青年に吹き込む<sup>54</sup>」と述べているように、スポーツによる国策事業という意味合いを含んだ満洲遠征に、日系 2 世が参加していた事実は注目に値する。しかし、満洲国憲兵によって巨人のヴィクトル・スタルヒン<sup>55</sup>が拘束される事件があったことや、日米関係の悪化による軍部の 2 世に対する監視強化などの背景を考慮すると、満洲リーグに参加した若林も何らかの形で監視されていた可能性がある。この満洲リーグ終了後には、河野が「満洲遠征の成功は、野球を通じて日本精神を生かすということを選手が本当に自覚した結果<sup>56</sup>」であると述べているように、連盟は満洲リーグを成功したものであると認識している。また、実際に選手として参加したタイガースの富樫興一は「選手は職業野球精神をはっきりもたせて善導すれば、満洲リーグは将来非常にいい結果をもたらす<sup>57</sup>」と述べている。このように、連盟だけでなく選手も満洲リーグ開催の意図を理解しており、連盟が期待していた通りの行動をしていたことがわかる。若林も当時の軍部による野球批判や、連盟の軍部に協力する姿勢を示す様々な対応があった状況に対して、「健全スポーツの 1 つである我が野球を通じて、頹廢する世道人心を善導良化するは私たちに課せられた使命である<sup>58</sup>」と述べていることから、当時の職業野球界を取り巻く状況を憂いており、野球を通じて世の中を変えていこうとする思いが読み取れる。しかし、こういった連盟や選手たちの思いとは裏腹に、職業野球界を取り巻く環境はさらに厳しくなっていき、同時に日本における 2 世の立場も苦しいものとなっていく。

## 第 2 節 新体制下のプロ野球と 2 世

1940 年に近衛文麿内閣による、軍を統制下に置く挙国一致の戦時体制を目指す近衛新体制が始まると、野球への風当たりはますます強まる。日中戦争の長期化や独伊との協力体制の強化によって日本と米英との間の緊張感が最高潮に達していた状況の中で、軍部や右翼を中心に、外来スポーツや文化を排斥しようとする動きが一層激しくなったことで、職業野球界はこういった強い逆風への対応が求められることとなった。連盟は 1940 年 9 月に、「フェアプレーの精神の遵守」や「世界選手権の獲得」といったベースボールを連想させる米国色の強い文言を排除し、「日本精神に即する日本野球の確立」などを新たに加えた新綱領を策定した。また球団名や野球用語の日本語化を行い、英語を徹底的に排除していくことで、野球の「日本化」を進めていった。さらに、軍部が当時スポーツ界に求めていた「健全

---

<sup>54</sup> 「野球界」1940 年 10 月第 2 号、88 ページ。

<sup>55</sup> ロシアからの難民という形で来日。適性外国人として監視を受け、ノモンハン事件により日本人のロシア人に対する反感が強まると、野球の日本化を目指す連盟により、「須田博」への改名を余儀なくされる。

<sup>56</sup> 同上。

<sup>57</sup> 同上誌、89 ページ。

<sup>58</sup> 『ボールフレンド』1948 年 12 号、7 ページ。

な娯楽<sup>59</sup>」としての野球をアピールすることで、軍部や大衆からの批判を躲そうと考えた。このように連盟は、野球が日本で生き残る道を模索し、あらゆる対応策を行使した。しかし、鈴木惣太郎が「規則の日本化など無用。重要な規則が、日本化という理由によって変更されるならば、それは最早野球競技ではなく、他の異なった競技となって仕舞う<sup>60</sup>」と語っていることから、野球関係者の中には今回の連盟の対応を批判する声も少なくなかった。この方法でたとえ野球界が生き残れたとしても、これまで日米野球交流などで培ってきた日本の野球が消え去ってしまうことを懸念していたのである。この連盟による野球の日本化は、2世や外国人の選手たちにとって状況を一変させる大きな出来事でもあった。新綱領には「外人選手は絶対廃止、但し既存の者は国籍を得させて日本人とする、なほ東亜民族以外の外人は球団に加盟させない」という条項があり、連盟理事の赤嶺昌志は「米国生まれの2世日本人でも米国至上の思念を有するなら、純然たる日本人たらずとしてこれを拒否するに至るかもしれない<sup>61</sup>」と述べている。つまり、新体制下の野球は外国人の参加を拒絶し、2世に対しても生まれ故郷に関する一切を断ち切らせ、大日本帝国への絶対服従を強制したのである。さらに1941年には、アメリカ政府による2世引き揚げが実施され、日本政府も2世にアメリカか日本どちらかの国籍を選択することを命じた。日本に住む多くの2世がアメリカ政府の命令に従い、日本を離れアメリカ本土やハワイへと帰国したが、若林ら2世野球人たちはどのような選択をしたのであろうか。彼らの選択は自身の置かれた状況に応じて大きく分かれることになった。若林は神戸のアメリカ領事館の呼び出しを受け、ハワイへ帰還するよう求められたが、それに従わず、アメリカ国籍を離脱し「日本人」となった。彼が日本に残ることを決意した理由として、日本で「大和魂」を学んだと言っていることや<sup>62</sup>、2世の仲間引き揚げについて話し合った際に「みんな一緒に日本人になろう<sup>63</sup>」と述べたように、日本人としてのアイデンティティの確立が見られる。他にもカイザー田中や阪急の上田藤夫、明治大でプレーし、日本郵船に就職していた亀田重雄らが日本に留まることを決意した。その一方で、生まれ故郷へと帰っていく者もいた。ジミー堀尾は日本に残りたいと考えていたが、妻がアメリカへの引き揚げを主張したため、その意を汲んで帰国を決意した。また亀田重雄の弟である忠（里鷲）と敏夫（阪神）は共にハワイへと戻ることを選んだ。このように2世野球人の中でも決断は分かれており、日米の狭間にいた2世たちはどちらか一方を選択することを余儀なくされ、戦争によって分断されてしまったのである。これに関し、カイザー田中は「向こうに生まれても日本男子の精神を持っています」と思いを語り、帰国していった2世についても「表面ではアメリカに国籍がありますが、内面では日

---

<sup>59</sup> 国民総力戦の源泉となり、国策遂行への勇猛心を奮い起こしうるようなもの。『野球界』1941年10月第2号、38ページ。

<sup>60</sup> 『野球界』1940年12月第2号、110ページ。

<sup>61</sup> 『野球界』1940年11月第2号、169ページ。

<sup>62</sup> 山本茂、前掲書、133ページ。

<sup>63</sup> 同上書、187ページ。



本の国に尽くす覚悟でみんな準備している<sup>64</sup>」と擁護した。日本に残った田中のこの言葉からもわかるように、敵国で生まれた 2 世として批判の対象となっていた彼らは、日本への絶対な忠誠を示す必要があった。しかし、2 世にとってはどちらの選択をしても厳しい道が待っていた。アメリカでは日系人の強制収容が行われ、日本ではスパイ行為が疑われて特高により常に監視され続けていた。若林は法政大時代から活躍していたため監視はなかったものの、行動報告が義務付けられていた。このように、これまで日米の狭間で揺れ動いていた 2 世の立場は戦争によって決定づけられ、想像を絶するような辛く苦しい生活を強いられていった。1941 年 12 月の真珠湾攻撃をきっかけに日米が太平洋戦争へと突入していったことで、野球選手の応召も相次いで行われ、野球をするような状況ではなくなってしまった。当時のことを若林は「最早野球どころではない時代となったのであった。野球をやるのは非国民であると言われた。軍のエラ方に頭を下げないと何も出来ない時代であった<sup>65</sup>」と回想している。そうして職業野球は 1944 年 11 月の日本野球報国会（連盟から名称を変更していた。）の活動停止をもって終了することになった。

若林は職業野球の中止後、家族とともに妻の実家があった仙台に疎開し、その地で終戦を迎えることとなった。そして終戦後にプロ野球が再び開催されるようになると、若林ら 2 世は戦後のプロ野球復興に力を尽くしていった。戦時中に全く野球ができていなかった日本と異なり、ハワイでは本土から兵士としてやって来たメジャーリーガーとプレーする機会が増え、力をつけていった。そのため、戦後の選手が不足していたプロ野球界にとって、ハワイの日系人選手たちは欠かせない人材であった。若林ら日本に残った 2 世を通じて、ウォーリーと那嶺要ら多くの日系人選手が来日し、日本でプレーしたことで、日米野球交流は再び盛んに行われるようになっていった。若林は戦後のプロ野球生活に関して、「今後私は全精力、全生活をタイガースのために、日本野球のためになげうって何の悔いもなかつもりだ<sup>66</sup>」と堅く決意している。若林は選手としてだけでなく監督としても指導力を発揮し、さらにグラウンド外の社会貢献活動にも精を出した。現在では、阪神タイガースの中で多大な社会貢献をした選手に贈られる「若林忠志賞」がつくられている。若林は自身の言葉通り日本野球に人生を捧げ、多くの功績を残したのである。

## おわりに

若林の戦前の野球人生から、日本とアメリカという二つの帝国の狭間で揺れ動く日系 2 世の姿が浮かび上がってきた。スポーツと政治が密接に関わり合う中で、若林ら 2 世が余儀なくされた決断には想像を絶するような苦悩と葛藤があったと思われる。ハワイで生まれ育った若林ら 2 世は、日本の野球に触れ、日本で生活をしていく中で、日米二つの帝国の狭間にある 2 世としての立場を理解し、スポーツの両義性が表面化していた時代を生き抜く

---

64 『野球界』1942 年 5 月号、138 ページ。

65 『ボールフレンド』1949 年 4 月号、36 ページ。

66 『ボールフレンド』1949 年 5・6 月号、45 ページ。

ためにはどうすればいいのかを真剣に悩み、決断していった。こうした彼らの決断が、戦後、日米野球交流の復活へと結びついていった。そして日系 2 世として若林が日本に残る決断をした背景には、彼が生まれ育ったハワイの日系コミュニティの存在があったかもしれない。若林の活躍を、ハワイの日系紙『日布時事』は「日系市民、日本進出の好例<sup>67</sup>」と伝えている。1924 年移民法により「帰化不能外国人」に指定されたハワイの日本人移民にとって、故国日本での若林の活躍は大きな希望を与えるものであった。若林本人はハワイの日系社会に対して、『日布時事』で「日本の職業野球は 2 世への好分野」として「日本に就職し、野球をもって、日米両語を勉強したならば、将来日米間において、いわゆるスポーツ外交によって、従来日本人がアメリカ人を理解するよりも著しく劣っていたアメリカ人の日本人理解の向上に資すること多大であると思います。なぜならばわが日本職業野球は近き将来は必ず日米間をプレーグラウンドとするからであります<sup>68</sup>」と語っている。若林は、自分自身がハワイの日系人を代表しており、自身の活躍が必ず同胞の社会進出への道に繋がると信じていた。それにより、多くの日系人が日米をまたいで野球というスポーツのフィールドで活躍し、日米の親善に貢献することを望んでいたのである。その願い通り、数多くの日系人が戦前・戦後のプロ野球で活躍し、特に戦後は日米野球交流復活の架け橋として多大な貢献を果たした。内田雅也が著書の中で「若林はハワイ日系人のヒーローだった<sup>69</sup>」と述べているように、若林は「野球を通じた日米親善」という自身の思いに加えて、苦しい生活を送っていたハワイの日系人の思いも背負って日本でプレーしていたのである。

#### 参考文献

- ・『日布時事』1931 年 1 月 30 日
- ・『日布時事』1940 年 1 月 1 日。
- ・『ボールフレンド』1948 年 12 号。
- ・『ボールフレンド』1949 年 4 月号。
- ・『ボールフレンド』1949 年 5・6 月号。
- ・『野球界』1940 年 10 月第 2 号。
- ・『野球界』1940 年 11 月第 2 号。
- ・『野球界』1940 年 12 月第 2 号。
- ・『野球界』1941 年 10 月第 2 号。
- ・『野球界』1942 年 5 月号。
- ・「読売新聞」1933 年 3 月 1 日。
- ・「読売新聞」1934 年 12 月 8 日。
- ・「読売新聞」1935 年 2 月 13 日。
- ・「読売新聞」1936 年 1 月 11 日。

---

<sup>67</sup> 『日布時事』1931 年 1 月 30 日。

<sup>68</sup> 『日布時事』1940 年 1 月 1 日。

<sup>69</sup> 内田雅也『若林忠志が見た夢 プロフェッショナルという思想』彩流社、2011 年、99 ページ。

- ・若林忠志「僕の野球生活」（法政大学高等師範部『鳳生』1933年12月28日。）
- ・飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地理』ナカニシヤ出版 2003年。
- ・池井優『白球太平洋を渡る 日米野球交流史』中公新書、1976年。
- ・内田雅也『若林忠志が見た夢 プロフェッショナルという思想』彩流社、2011年。
- ・沖田行司編『ハワイ日系社会の文化とその変容』ナカニシヤ出版、1998年。
- ・熊澤拓也「戦前日本のスポーツ外交と日米親善—1933年から1937年までのアメリカンフットボールを事例として—」『スポーツ社会学研究』23巻1号、2015年。
- ・坂上康博『権力装置としてのスポーツ 帝国日本の国家戦略』講談社選書メチエ、1998年。
- ・坂上康博『スポーツと政治』山川出版社、2001年。
- ・坂本邦夫『紀元2600年の満州リーグ 帝国日本とプロ野球』岩波書店、2020年。
- ・島秀之助『白球とともに生きて ある審判員の昭和野球史』ベースボール・マガジン社、1988年。
- ・田代正之「中等学校野球の動向からみた「野球統制令」の歴史的意義」スポーツ史研究 第9号、1996年。
- ・永田陽一『ベースボールの社会史 ジミー堀尾と日米野球』東方出版、1994年。
- ・中鉢奈津子「ハワイ日系人社会の特徴」外務省調査月報、2007年。
- ・波多野勝『日米野球史—メジャーを追いかけた70年』PHP新書、2001年。
- ・法政大学史委員会・法政大学史センター『法政大学野球部創部100周年記念展示会 法政野球100年解説集』、2016年。
- ・「法政大学の歴史（6）」法政大学校友連合会報、2006年1月1日。
- ・森 仁志 『越境の野球史 日米スポーツ交流とハワイ日系2世』関西大学出版部 2018年。
- ・山本茂『七色の魔球 回想の若林忠志』ベースボール・マガジン社、1994年。